とるべきスタンス……株式の価値を知る

［4］ 本質を見よ

投資のリターンは、企業が日夜生み出している付加価値から生まれる。企業は毎年の利益の一部を配当金として支払い、残りを株主資本に加える。翌年、大きくなった株主資本を活用して、より大きな利益を生もうとする。その利益はまた、配当金と株主資本の増加として株主のものとなる。このプロセスは永遠である。株式投資の本質は、この株主資本を保有することに、ほかならない。

株主資本増加の原資は、企業の利益である。そこで投資家は、収益見通しに基づいて株価の予測をしようとする。さらに、株価の動きそのものが、もっと短い株価の変動を生み出す。株価は影でしかない。影の動きに超然として、株主資本の価値の推移に注目していればよい。

4-1

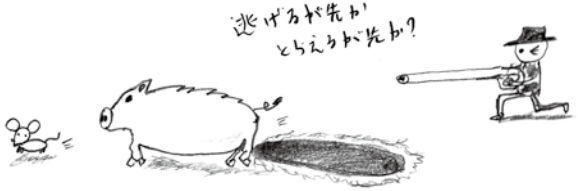
罔両（もうりょう）の疑問

より大きなトレンドが、小さいトレンドを支配する

罔両とは、影の外縁にできるうすい影である。
あるとき、罔両が影を批判した。
「お前さんは、歩いていたかと思えば立ち止まり、
座っていたかと思えば立ち上がる。なんでそう節操がないのだ」
すると影が答えた。
「お前は、おれが主人の形のとおりに動くと言って非難するが、
我々の主人だってほかの何かによって
動かされているのではないだろうか。
しょせん我々には、
なぜ自分が動くのか分からないのだよ」（荘子、斉物論）

非常に短い株価の動きは罔両
もっと長い株価の動きは影です。
短い期間の株価変動は
より長期の変動に支配されています。
株価は株主が保有する価値の影ですが
企業価値すら景気循環や
経済構造の変化により変化をしています。
超長期の潮流が海の底にあり
その上に、長期、中期、短期の波が
存在するのです。
表面の波は大荒れです。
超長期の流れであるメガトレンドは
安定して力強いものです。
本質は常に海底深く流れる潮流なのです。
短期の小さなトレンドはいつも
長期の大きなトレンドに支配されています。

罔両は影に、影は実体に、実体は状況に…。
次の動きなど、誰にも分からない。



4-2

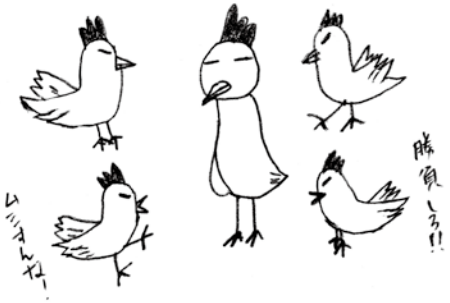
いまだ木鶏たりえず

短期的な株価の動きに超然としていることが成功の秘訣

闘鶏を仕込む名人が王様から一羽の鶏の訓練を仰せつかった。
王様は十日ごとに「そろそろ、試合に出せるか？」と聞いてくるが、
名人の答えは「まだでございます」が続く。
殺気だって敵を求めていたり、
ほかの鶏の鳴き声や気配に闘志をみなぎらせたり、
ほかの鶏を睨みつけいきりたったりするというのだ。
そして四回目、ついに名人が答えた。
「よろしいでしょう。他の鶏がどんなに鳴いても挑んでも動ぜず、
まるで木彫の鶏のようです。
自然の徳がそなわり、姿を見ただけで
どんな鶏も逃げ出すでしょう」　（荘子　外篇）

「われ、いまだ木鶏たりえず」という言葉は
前人未到の六十九連勝を
続けていた横綱双葉山が
昭和十四年一月場所で
新進気鋭の安藝ノ海に
敗れたときに知人に打った
電報文として有名です。
「猫型の投資家は儲からない」という言葉を
聞いたことがありませんか。
猫は動いているものを見ると
飛びつかずにいられない。
株価が動くとすぐ飛びつく猫型投資家は
儲からないのです。
国内外の名だたる投資家は
株価やほかの投資家の動きから超然とし
ひたすら自分の信じる価値の本質を見て
投資を行います。
これぞ、まさに木鶏の心境です。

弱いニワトリほどケンカ好き

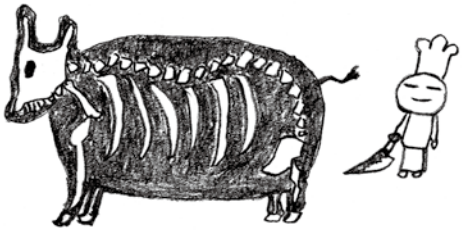


4-3

カリスマシェフ、庖丁（ほうてい）の話

マーケットの理に従ったムリのない投資をする

庖丁という名料理人が、王様の前で牛をさばく妙技を見せた。
その手さばきを見た王様は「超絶技巧だ！」と感嘆の声をあげた。
庖丁は「恐れながらこれは技を超えたタオでございます。
わたくしも、最初は牛の外形が気になりました。
しかし何年か経つと、牛の骨や筋が見えるようになりました。
さらにいまでは、牛に向かうと感覚や意識は動きを止めて、
ただ、体の自然な動きに任せるだけになりました。
すると、何も意識しないでも天理によって
牛の隅々までさばくことができるのです。
数千頭の牛をさばいたこの包丁を見てください。
刃こぼれひとつせず、新品同様なのです」（荘子、養生主）

毎日使う包丁（ほうちょう）が、人の名前だと知って
驚いた方もいるのではないでしょうか。
その道を極めた人というのは
ことさら頭などで考えなくても
体が自然に正しいことをするものです。
さて、投資でも経験や知識が身についてくると
自分なりに企業の価値や成長力を判断して
行うようになるでしょう。
しかし、そのような技術も超越して
マーケットの理に従った
ムリのない投資をしようというのが
リラックス投資です。
タオは時空を超えたものです。
リラックス投資は
時間と空間を味方につけます。
ムリのない方法だから長く続けられる。
何度も相場の荒波をくぐり抜けても
刃こぼれひとつしないのです。

わたしの前では、裸も同然